『別府大学紀要』100周年記念号の刊行に際して

別府大学学長　**西　村　　明**

学校法人別府大学創立100周年記念号として『別府大学紀要』第50号が刊行されますことに心からお祝い申し上げます。この機会に『紀要』について平素の思いを少し述べさせていただきたいと思います。

紀要はその大学の研究水準を表す極めて重要な刊行物であり、大学の生命とも言えます。日本の大学では、それぞれの学部において国内向けに紀要や機関誌を刊行するのが普通となっておりますが、世界では珍しいのではないかと思います。日本の幾つかの大学では、その出版費がしばしば学生会員の会費に依っており、美しい紀要が刊行されています。お陰で日本の研究者は自己の研究成果をいつでも発表できるような有利な条件を持っています。しかしながら、余りにも安易に論文が発表されるようになり、最近では研究者の研究活動を評価する場合に、紀要における論文は評価されなくなりました。そこで、各大学はレフリー制を導入し、２名のレビューを経た論文以外を掲載しないことにしています。しかし、レビューする人の能力や公平性のみならず、それを支える信頼すべきシステムが問題となります。私も幾つかの紀要のレビューを引き受けておりますが、私がレビューしていることがレビューされている人にわかり、厳しい評価をした結果学会で会ったらにらまれたことがありました。（もっともレビューされる著者が誰であるかが分かるような論文の書き方も問題なのですが……。）これも日本的で、覆面レビューの体制ができていない結果です。

私が所属しているアジア太平洋管理会計学会でも機関誌を刊行しておりますが、２名のレビューを受け、認可されないと論文を掲載してくれません。これまで数回投稿しましたが、英語の誤りや論理的な問題、証明の仕方など徹底的に指摘されました。当然のことですが、学会の会長であれ、雑誌の編集委員であれ、全くお構い無しです。返送されてきたコメントと評価をみて、情けなくなり、自分の力の無さを知らされます。しかし、それに挫けるわけにいきません。相手に分かるように原稿を書き直さなければなりません。経験した人は御承知のことと存じますが、これは厄介で、時には腹立たしいこともありますが、非常に勉強になります。この経験はアメリカの雑誌に投稿した時に始まりましたが、年齢のせいかもしれませんが、最近の方がより厳しく感じます。このように、紀要の水準はレビューの水準にかかっていると思います。その意味で、世界では、レビューの無い紀要は水準のないのと同じように受け取られます。

以上、『別府大学紀要』も百周年を契機にレフリー制を取り入れては如何であろうかという思

いで自分の経験を述べましたが、もう一つの提案があります。国際的なジャーナルにしてはどうだろうかという提案です。別府大学の研究成果は非常に高いものがありますが、世界に発信されていないように思います。年１回でも、２年に１回でも、『紀要』の英語版を、それこそレフリー制のもとで刊行すれば、世界の学界に貢献できるのではないでしょうか。幸い今年４月から国際経営学部が発足します。ここでは、国際的な経営会計が研究教育の対象でありますから、世界の研究成果を吸収するとともに、世界に自分たちの成果を発信しなければなりません。私たちはたまたま別府大学というところで、教育研究に従事しているのであり、その研究成果は日本だけでなく、世界全体に結びついています。『紀要』も狭く別府大学というところに固執しないで、日本のみならず世界に開放しては如何でしょうか。本学では、本年４月から文学部は改組され、国際言語・文化学科と史学・文化財学科、人間関係学科の３学科から構成され、学科の壁を低くし、研究教育の交流を強め、複合領域の研究を展開しようとしております。さらに国際経営学部が開設されます。この新たな方向に向かって研究を支える『紀要』がさらに発展することを願っています。これは、必ず「真理はわれらを自由にする」という建学の精神をさらに豊かに、現代的に発展させることに繋がっていくでしょう。